様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０８３８

研究課題名（和文）エジプト王バクエンレンエフのギリシア・ローマ世界への伝播過程に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Diffusion Process between Ancient Egypt and the Mediterranean World in the 8th Century BC: In Case of Bakhenrenef

研究代表者
大城　道則（OHSHIRO, MICHINORI）

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：００３６５５２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、古代エジプト史のなかで、特に曖昧な時期である第三中間期の第24王朝の社会状況を古代エジプト王バクエンレンエフ（ボッコリス）に属する数少ない文字史料・考古資料を通して明らかにすることを目指した。研究を進める過程で第三中間期を専門とするスウォンジー大学のサグリロ博士、エジプト探査協会のノウントン博士、ウィルソン博士を日本に招聘し、三度の研究発表会を開催した。今後、彼らと研究代表者が発表した内容をまとめて出版する計画を進めている。その一環として「タルクイニア出土のボッコリス王のファイアンス製壷―紀元前8世紀ににおける古代エジプトと地中海世界―」が『関大西洋史論叢』の最新号に掲載された。

研究成果の概要（英文）：　In this project, I discussed the social circumstances of the Third Intermediate Period, especially the 24th Dynasty from the archaeological assemblages with the name of a king Bakhenrenef. So I invited three Egyptologists, Dr. Troy Sagrillo (Swansea University), Dr. Chris Naunton (Egypt Explore Society) and Dr. Penelope Wilson (Durham University), and held the workshop in 2014, 2015 and 2016. At the first onset, I published The Bocchoris Vase from Tarquinia: An Interaction between Ancient Egypt and the Mediterranean World in the 8th Century BC, in Kansaidaigaku Seiyoushironsou: Western History Essays, Kansai University Vol.19.

研究分野：古代エジプト史

キーワード：古代エジプト　西洋史　考古学

１．研究開始当初の背景

1986 年にまとめられた K. キッチンの著書 *The Third Intermediate Period in Egypt (1100-650 BC)*（1995 年に改訂版出版）を起点として、第三中間期研究は始まった。その後、1990 年代に入り、キッチンの著書とその編年は、A. リーヒーを中心としたバーミンガム学派の研究者たちによって、批判の的となるが、現在においても彼の著書は基本書としての地位を保持している。国内における古代エジプト第三中間期研究は、研究代表者及び藤井信之氏の一連の論考以外になされていないのが現状である。例外は 1980 年代から古代学協会によって開始され、現在も筑波大学によって継続されている中エジプトのアコリス遺跡における調査で出土したリビア人のエジプト王オソルコン 3 世の碑文に関する成果である。この碑文は、アコリス遺跡の報告書及び研究代表者の論考“The Identity of Osorkon□”とそれらを引用している複数の論考により、現在古代エジプト第三中間期研究を行う上で欠くことのできない基礎資料となっている。

国外における研究は、2000 年以降著しく盛んとなり、従来の編年研究以外にも 2007 年の H. サラーハによるジェンダー研究や 2009 年の R. K. リトナーによる包括的碑文研究を筆頭に多角的な研究成果が出始めている。また近年数多くの考古学的発掘が行われ、それらの成果が逐次報告されているが、ナイル河に近い地域のみならず、西方のオアシス地域など地理的に離れた場所における調査でも第三中間期の考古資料・碑文史料の存在が報告されている。ダクラオアシスのアムヘイダにおける O. E. ケーパーらの発掘調査はその好例である。上記のような近年の研究活動の活発化は、2007 年 10 月 25 日から 27 日に掛けてライデン大学において開催された古代エジプト第三中間期研究の学術大会に端を発している。その後、G. P. F. ビョークマンらによって編集されたこの学会における研究発表内容は、2009 年に出版された。

このような国内外における研究状況の中、本研究では第三中間期の中でも最も不明瞭な王朝であるとされている第 24 王朝を採り上げ、その王朝二代目の王にして最後の王であるバクエンレンエフ（ギリシア語名ボッコリス）に焦点を当てる。そして、なぜこの王がエジプト国内よりもその周辺の外部世界、特にギリシア・ローマ世界において、高い知名度を得たのかという過程を解明することで、古代エジプト第三中間期のグローバル化の一側面を明らかにすることを目指す。

バクエンレフ王は、第三中間期を理解する上で重要な人物であることは、研究者であれば誰もが認識しているが、これまでに彼を中心に扱った研究は、他のリビア人王たちと比較して極端に少ない。その最大の理由は、エジプト国内において知られているバクエンレンエフ王に関する資料が極めて少ないことにある。しかしながら、エジプトの周辺世界にまで視野を広げると、この王に関する考古資料及び文献資料が複数存在することがわかる。ナイル世界を越えた周辺諸地域に存在するバクエンレンエフ王に関する資料、特に古典史料の使用は、エジプト学側からなされたことが無く、この王のアイデンティティをさらに明確にできる可能性を十分に秘めている。

２．研究の目的

本研究において、バクエンレンエフ王に注目した最大の理由は、上述したように知名度が比較的高く、実在の人物であることが確かであるにもかかわらず、この王に関する資料が極端に少ないことにある。現時点で確実なものとしては、以下の資料が挙

げられる。
1. メンフィスのセラペウムで出土した治世第 6 年の碑文とスカラベ
2. ピテクーサイの第 325 号墓から出土したバクエンレンエフの名前が彫られたスカラベ
3. タルクイニア出土のバクエンレンエフの名前を持つファイアンス製壷

以上の資料からわかることは、バクエンレンエフ王が少なくとも 6 年間エジプトを統治した実在のエジプト王であり、ピテクーサイやタルクイニアというイタリア方面において、その名前が知られていたということくらいである。しかしながら、バクエンレンエフ王は、ボッコリス王という呼び名でギリシア・ローマの叙述家たちによって、複数の史料の中で「賢者」あるいは「慎み深い王」として取り挙げられている。例えば次の例が挙げられる。
1. 紀元前 3 世紀のエジプト人神官マネトの『エジプト誌』
2. 紀元前 1 世紀頃のディオドロス・シクルスの『世界史（文庫）』
3. 紀元後 1 世紀のプルタルコスの『英雄伝』と『オシリスとイシスの神話』
4. 2 世紀から 3 世紀にかけての歴史家アイリアノスの『動物誌』
5. 紀元後 1 世紀後半から 2 世紀初頭にかけてのタキトゥスの『同時代史』

これまでなされてきたエジプト側からの考古資料のみによる研究ではなく、ギリシア・ローマ側からの文献史料を同時に用いることで、バクエンレンエフ王＝ボッコリス王自身のエジプトとギリシア・ローマ世界における創られたイメージ、古代エジプト史上最大の混乱期であった第三中間期の持つ意味、さらに彼が後の時代にギリシア・ローマ世界に与えた影響から、古代エジプト文化の他地域への文化浸透のメカニズムを明らかにすることが可能となる。

３．研究の方法

研究目標達成のために、初年度は資料・史料の整理を行った。本研究では、英国スウォンジー大学に所属する第三中間期のリビア人王シェションク 1 世の専門家である T. サグリロ氏を研究協力者としているため、リビア人王に関する網羅的な整理が可能となった。また 2015 年にはロンドンのエジプト学協会（EES：Egypt Explore of Society）より、同協会所蔵の資料の使用許可も受け、さらに同協会の事務局長であり、第三中間期のヌビアに関する研究者でもある K. ノウントン氏を日本に招聘し、研究・検討会を実施した。2016 年には第三中間期研究と第 26 王朝の都サイスの発掘調査を行っているダラム大学の P. ウィルソン氏を招聘し、情報交換と研究会を実施した。第 24 王朝の並立王朝とその前後の王朝を研究している研究者からの最新情報と意見交換により、本研究課題を大いに前進させることとなった。

４．研究成果

本研究は研究代表者によるこれまでの研究「若手研究(B)「隊商都市パルミラの彫像の指輪からみた古代ローマ文化の受容についての研究」と「基盤研究(B)（海外学術調査)「エジプト西方砂漠のオアシス地域における文化受容の研究」を踏まえたものであり、「古代エジプト文化が周辺世界に与えた影響」に関する総合的研究の一環である。主題に据えたリビア人エジプト王バクエンレンエフ王の治世とその前後の時代背景を検討した本研究の成果として、次の二点が挙げられる。①野蛮なヌビア人たちと戦った賢者のエジプト王ボッコリスのイメージは、当時地中海世界を股に架けて縦横無尽に経済活動を展開していたギリシア人やフェニキア人商人たちを通じて各地へと伝播した。②実在の人物であろうと考えられるが、創り出された王のイメージが先行し、

ギリシア・ローマ世界に定着した後、当時の人々にとってボッコリスは、実在のエジプト王として認知されていく。これらのことから、ナイル河谷ではほとんど重要な役割を果たすことの無かった可能性が高いこの王は、ギリシア・ローマ世界において予想外の名声を得ることとなった。

なおイタリアとフランスにあるバクエンレンエフ王の考古資料のデータ収集は政情不安のため中止したが、エジプトにおいて可能な限りデジタル・データを取得している。これらは今後研究を進める上で極めて有効なものであり、今後論文として発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
大城道則「古代エジプト第 25 王朝におけるアムン神崇拝の受容とピラミッド構造の復活」『駒澤大学文学部研究紀要』第 72 号（2014）、99-118 頁
大城道則「カノポス容器にみる古代エジプト人の死生観」『死生学年報』2015 年、71-88 頁
大城道則「古代エジプトの都市アクミムの重要性―紀元前 1 千年紀の異文化流入と黄道 12 宮―」『関西大学西洋史論叢』第 18 号（2015）、45-62 頁
大城道則「タルクイニア出土のボッコリス王のファイアンス製壷―紀元前 8 世紀における古代エジプトと地中海世界―」『関西大学西洋史論叢』第 19 号（2016）、16-31 頁

〔学会発表〕（計３件）
Michinori Ohshiro, Developmental Sequence of Pyramids, Leicester Ancient Egyptian Society (New Walk Museum in Leicester), 2014 年 3 月 15 日
大城道則、Searching for the Tomb of a Theban King Osorkon III、2015 年度駒澤大学古代エジプト研究会年次大会（駒澤大学）、2015 年 9 月 23 日
大城道則、なぜプスセンネス 1 世は銀の棺に埋葬されたのか：第 21 王朝におけるリビアの影響、2016 年度駒澤大学古代エジプト研究会年次大会（駒澤大学）、2016 年 10 月 9 日

〔図書〕（計２件）
大城道則『図説ピラミッドの歴史』河出書房新社、2014 年
大城道則『古代エジプト　死者からの声―ナイルに培われたその死生観―』河出書房新社、2015 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大城　道則（OHSHIRO MICHINORI）
駒澤大学・文学部歴史学科・教授
研究者番号：００３６５５２９

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
トロイ・サグリロ（TROY SAGRILLO）
スウォンジー大学・歴史・古典学科・上級講師